

# 大和高原の巨石(磐座)伝承

植村 勝彌

最初の朝廷が誕生した大和の地には、日本各地に散在する説話を今に伝える磐座が多く存在する。まるで引き寄せられたかのように。



図：大和高原地図

大和高原は奈良県の東北部に位置し、春日山から三輪山まではほぼ一直線に春日断層で大和平野と境をなし、南は初瀬川、宇田川、東は名張川、五月川あたり、北は木津川が山城地方と境する。面積は大和平野の広さを持つ標高3〜500mの丘陵地域である。大和高原で発掘された縄文遺跡は一万二千五百年前の桐山和田遺跡、この遺跡は奈良市の水源として布目川ダムを築くために発見された。また、日本史地図や教科書縄文遺跡分布図等にかかる大川遺跡、九千年昔から出土した押し型文土器は「大川式」という。両方とも木津川水系の便利さを生かした場所である。水田整備事業で近年発見され

た柚ノ川遺跡や誓多林遺跡、そしてすでに知られる上入田遺跡、鈴原、高塚遺跡などの遺跡の多くは海拔3〜500mにある。

私たちの先祖縄文人は、北の方からマンモス等を追ってやって来た人達の子孫だと思う。(縄文中期には黒潮や大陸からも渡って来た)。そして諸条件の良い大和高原で、獣、魚、木草の実、根などを獲って想像以上の生活を行っていた。つまり、自然の恵みによる食料、住居の条件、四季それぞれのうつり変わり、つまり太陽の恵み、風や雨の順調なこと、人々が健康で生活できることを願った。巨石、山等に自然発生的によりどころを感じ、信仰し聖なる場所が定まっていた。今、私達が見る巨石、

磐座、山は時代とともに中身が変わり、現在まったく忘れられた神（石や山）もあれば、農耕時代には農作の水神や風神などになった。次の時代には豪族の先祖神になった所もある。

その様子を為政者の都合の良い神となり、また時代が求める神となる。

大和高原は高地であった為、日本史年表のような時代区分より異なっていた。縄文、弥生のまぎった時代が長かった。都祁地域（大和高原南側、古代都祁国と呼んだ）で五世紀中頃に110mの大型前方後円墳（三陵墓古墳の一つ）が出現する。大化改新後大和高原の北側半分は、律令制で添上郡楊生郷となる。その田原地区の茗荷遺跡から五世紀後期の住居跡、水田跡が発見され、大和高原の水田化開発が雄略天皇（倭王武）の時代からはじまったと報じられた。

八世紀奈良に平城京の遷都があり七五二（天平勝宝四）年東大寺大仏開眼。都に大寺が次々と建立された。七五五年大和高原の40%

程が東大寺へ孝謙女帝が施入する。（板ばえ杣である）また、添上郡側は水間杣、北野杣として新薬師寺等に施入されている。つまり、板が取れる大木の生えた杣（板ばえ杣）でもわかるように大木の繁った山林地帯だった。開発禁止地であったこともあり荘園開発も遅くなる。

そこで本題の巨石（磐座）について、今回は都祁国といわれた南側から一ツ、添上郡楊生郷（大化前

の地名が記録にない）から一ツずつ紹介する。

八ツ岩は縄文上入田遺跡の近くにあって都祁地方の最も西に位置する山頂にある。春日断層を大和平野に流れる代表的な布留川の源流である。途中天理ダムや支流に断層を流れ落ちる桃尾滝がある。布留川や桃尾滝は「万葉集」や「古今和歌集」に詠まれている。（現在は天理市長滝町）



写真：八ツ岩

八ツ岩は、石上神宮（国宝七支刀、国宝拜殿、重文楼門等で有名）の奥ノ宮と言われる。今は訪れる人も無くなったが八にちなみ八日が参拝日で、桃尾滝からのコースを利用したらしい。その巨大さと自然の不思議に先ず驚く。縄文人は神秘さを感じ偉大なる力を感じ神宿る聖地（縄文人は神の事を何と云ったか）に、山の幸や太陽の恵みを願ったと思われる。大和平野が弥生時代に入ると、水源の神、農耕の神、水の神となっていく。天理市史の伝承には次のように載せている。

「昔、出雲の国のひの川に住んでいた八岐の大蛇は、一つの身に八ツの頭と尾をもっていた。素盞鳴尊がこれを八段に切断して、八ツ身に八ツ頭がとりつき八ツの小蛇となり天へ昇り水雷神と化した。そして、天のむら雲の神剣に従って大和国の布留川の川上にある日の谷に臨幸し八大竜王となった。今そこを八ツ岩という。」

天武天皇のとき、布留に物部邑

智という神主があった。その夜夢をみた。八つの竜が八つの頭を出して一つの神剣を守って出雲の国から八重雲にのって光を放ちつつ布留山の奥へ飛んできて山の中に落ちた。邑智は、夢に教えられた場所に来ると、一ツの岩を中心に神剣が刺してあり八つの岩にはじけていた。そして、一人の神女が現れて「神剣を布留社の高庭におまつり下さい」と云う。そこで布留社の南に神殿を建てて祀ったのが今の出雲建雄神社(式内社)であるという。

八ツ岩に一ツだけ平たいものがある。これを「ばくち場」と云う。貞観年中(八五九〜八七七)に吉田連の一族、都祁の村公庸敬が神殿を造って神格となし、八剣神となし、天理市田井庄町の八剣神社として祀られたという。八ツ岩の隣にはおづき谷という所がある。八ツ岩に蛇がいた。その目の玉がほおづき谷のように赤くみえたのでほおづき谷といったという。

次に、楊生郷地域でとりあげる

のは、立磐神社御神体の巨大な岩(石)である。現在は式内社夜支布山口神社摂社となっている。山口神社は元は南の方の向いに、風、雨の神として祀られていた。折念まつりには馬一頭が加えられたほど朝廷から崇敬されていた。

いつのころか立岩神社の森に移ってきて、いまでは本家で立岩神社を摂社としている。農耕時代になると風、雨(水)神が大事な神となったことを裏づけている。

南側の水田整備事業で発見された三〇〇〇余年昔縄文晩期の遺跡から四〇〇〇基の墓もみつかった。この地域が早くから人々が住んでいたことが証明された。この人達が信仰の対象としたのが立磐神社の巨大な石であろう。



写真：一体山磐座

その位置から南2kmほどに一体山(五九五m)という山がある。山頂には磐座(写真)があり、周りには燈籠の残石などが積まれ、石仏(行者さん)を祀っている。

この一体山は、そしてこの磐座は、この山の周りの人々の信仰の場、非常に古代人にとって意義のある聖地だったのだろうか、周辺には何の伝承もない。

大和高原で代表的な信仰の山、

磐座の山は神野山(六一九m)であるが、塔ノ森(六六〇m)壇ノ山(六一一m)等も同じ性格のものである。次回とりあげて報告してみたい。

夜支布山口神社、立磐神社周辺には古墳が多く発掘されている。郷を支配した楊生首の先祖達のものである。この巨石や磐座を引き継ぎその時代の神になっていく。また時代とともに不必要になり忘れられていく等についてはまたの機会とします。